



寄贈資料の中から

酒器

今回は、資料の中から酒器を紹介します。

樽は液体用の運搬具のことで、酒樽には板を指し合わせた指樽や、板を円形に組み立てて竹たがで締めた結樽があります。指樽は全体が黒漆塗りで木口が朱塗りされています。上部に注ぎ口があり、鉈が打たれています。指樽は室町時代頃から江戸時代末頃まで使われました。平樽は、結樽のうち扁平なものをさします。鎌倉時代末から室町時代にかけて、たがを使った容器の技術が発達し、江戸時代に結樽は指樽に代わり流通しました。角樽は、柄が角のように長い、朱や黒漆塗りの結樽で、江戸時代後期に発達しました。指樽、平樽、角樽は主に祝儀の際の贈答用で、一対で用いられます。

杯は、酒を飲むための器です。平安時代までは主に土器が使われていましたが、その後金属製や漆器のものも現れ、後に爛の習慣に伴い陶磁器が普及しました。

杯台は杯を据える台です。木製や陶製で、小型の膳のようなものや、円形で鐙の広いものなどがあります。

銚子は酒を杯に注ぐ道具で、柄や鉈がついています。爛鍋は、銚子に似た金属製の大型容器で、酒を入れて温めるものです。

湯桶は酒や湯、汁を注ぐ曲物で、客に勧めるためのものです。漆塗りのものが多くあります。

片口は一方に注ぎ口がついた鉢で、酒や醤油などを口の狭い器などへ移し替える時に使います。

德利は酒を入れる容器で、陶磁製が多く、様々な種類があります。大きさも各種あり、三升入りから一合入りまであります。貸德利は酒を販売するための貸容器で、側面に店名や地名などが書かれています。白鳥德利は首が長いのが特徴です。樽形德利は結樽を模した磁器で、贈答などに使用されました。爛德利は、温めた酒を直接杯に注ぐためにできた、小型の德利です。瓶子と神酒德利は酒を神前に供えるためのものです。

袴は爛德利を据え置く器で、方形や円形があります。

駿河湾の漁

川上 貢さんの漁話

ハマチの養殖 (3)

1kg～2kg程度のイナダをから育て始め、3kg程度のハマチとなったところで出荷となる。養殖されたハマチは競りにかけられるわけではなく、kg単位1,000円と値段が決まっていた。出荷を行う日は魚市場には行かず、出荷の準備に専念する。当然のことながら、魚市場には行かないので、餌となるサバを購入することができない。その日の餌やりは休みとなる。出荷するために養殖組合や近くに住む江梨の人たちに手伝いを頼む。AM 8:00頃から出荷するハマチを船の魚槽に移す。生簀いけすにいるハマチを集めるために四角い平面の網の一辺に沈子おもりをつけたトリアミを使用する。沈子をつけた対辺は生簀に横付けにした船に結びつけられている。沈子をつけた部分を生簀に沈め、沈子側に付けたロープを引き揚げて船側にたぐり寄せる。丁度、網のような形になり船側にハマチが寄せ集められるので、そこをタモアミですくい取り、魚槽へと移す。魚槽へ移し終えると手伝いの人たちとともに魚市場へ出荷しに行く(写真1)。出荷の作業は、お互いに頼みあい、助け合いながら協力して行っていた。

本格的に養殖を始めた頃は、1回の出荷で1,000万円の売上があることもあり非常に大きな利益を上げることができた。しかし、イナダの値段や餌となるサバの値段が高騰していくのに対し、ハマチの値段はいつまでもkg単位1,000円と変わらない。徐々に利益は少なくなっていく、先行きに暗雲が立ち込めてくる。

何年か同じ場所で養殖を行っていくうちにハマチに病気が現れ始めてくる。この病気にかかるとハマチの尾鰭や口先が白くなっていく。病気のハマチは出荷することができない。処分しなければならないが、初めのうちは生簀から取り除き、生簀の外へ捨てていた。しかし、病気を持ったハマチは海に留まる事になり、さらに病気を万延させてしまう。薬屋がよく来ていたが、効果はどうであれ薬を与えたハマチは出荷することなんてできない。病気のハマチを陸へ埋めるようにしたが、効果的な病気対策はできなかった。

養殖を行う場所として適した場所は、風が吹いても波が静かな場所である。ちょっと風が吹けば海が荒れるような場所は適さない。静浦であれば、台風が来ても波が静かであり、最適な場所である。しかし、江梨ではそうはいかない。台風を受けるとハマチが死んだり、生簀が沈みハマチが逃げってしまうという被害が出る。西浦漁業協同組合でハマチ養殖の損害保険の話が持ち上がったことがあったが、計算してみると高く採算がとれず、誰も入る人はいなかった。台風対策を

しようにも、簡単には生簀を移動させることはできず、台風被害が出ずに通り過ぎることを静かに神に祈りながら待つだけである。しかし、昭和57年8月の台風で壊滅的な被害が出てしまう。3,000匹のハマチが死に、生簀もこれ以上復旧しようがない状態となってしまった。

昭和52年頃から本格的に始めたハマチの養殖であるが、様々な状況が重なり、この台風を機に廃業することとなった。

廃業と言ってもすぐにやめることはできない。海に設置していた生簀を処分する責任がある。生簀は産業廃棄物のため陸へ揚げて処分しなければならない。しかし、陸へ揚げることは厄介なので海へ落して廃棄してしまった。そのことで海上保安庁に調べられ罰金を払うことになってしまう(写真2)。

ハマチの養殖の廃業後は並行してきた大瀬の峯下漁場での小型定置網だけを行っていくことになる。

(話：川上 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市今沢在住)



写真1：魚市場でのハマチの出荷

(昭和54年頃 川上 貢氏 撮影)



写真2：廃養生簀の調査に来た海上保安庁

(昭和57年頃 川上 貢氏撮影)

沼津の石丁場遺跡1

西浦江梨地区

・伊豆の石丁場遺跡

今からおよそ400年前、徳川幕府は江戸城の普請を諸大名に命令しました。断続的ではありますが、家康から3代将軍家光の代までの30年あまりに渡り、大規模な修築工事が行われました。工事の中でも石垣の構築は大変大きな工事であり、石垣をつくるために大量の石が必要となります。諸大名は良質かつ大量の石を求めて伊豆方面に人を繰り出しました。

石を採掘した遺構を石（切）丁場と呼んでおり、伊豆・西相模各地には、この時石が切り出された痕跡が残っています。沼津周辺でも西浦・戸田を中心に大名家が採石した遺構が残っている場所があります。特に、西浦地区ではその歴史的事実を証明する古文書が現代まで伝わっていて、現地の遺構と古文書がセットで残されている全国的にも貴重な地域です。近年、石丁場の研究が進展するにつれ、沼津地域の石丁場は学術的にも価値が高いと評価されています。

・西谷丁場

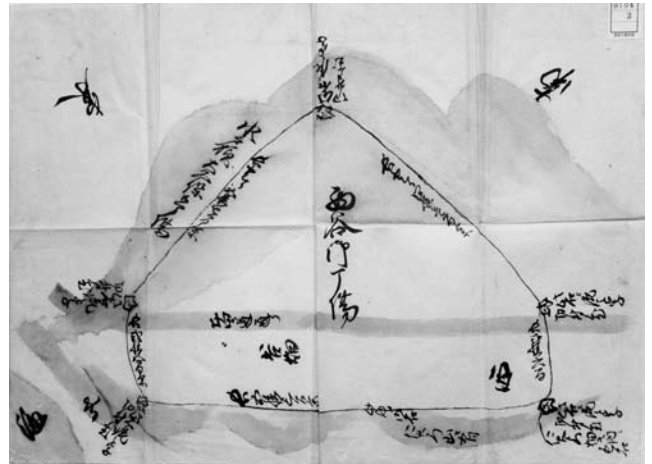
西浦江梨集落から井田に通じる道を少し登って行くと、道路のわきに漢字の「尾」の字が刻まれた石（下の写真）が見つかります。この石は何でしょうか？これを解明するヒントは、地元に残る古文書にあります。

江戸時代に地元で名主を勤めた加藤家には、罹災を免れた古文書が残されており、その中に一枚の絵図面があります。「西谷石丁場絵図」と呼称されているこの絵図面には、谷を挟んだ両側の山の斜面に墨で石丁場の境界線が引かれ、線が折れている各部分には、石が描かれ文字が記されています。例えば、谷付近には黄色い太線で「井田道」が書かれ、その脇にある石には「此石ニ尾乃字切付置」と書かれています。まさしく、現地に残っている石の状況と一致しています。この石は西谷丁場の位置を示すもののなのです。



では「尾」の字は何を意味するのでしょうか？同じ加藤家文書には「豆州君沢郡五ヶ所石丁場預ヶ帳」と

いう古文書があります。これは尾張徳川家が西浦地区で石を切り出し、その作業場所である石丁場と作業途中だった石を管理するよう地元へ命じ、作成・使用されてきた帳簿です。実は尾張徳川家の古文書を保管している徳川林政史研究所にも、今紹介した絵図と古文書に酷似したものが残っています。もうおわかりでしょう、石に刻まれた「尾」の字は尾張徳川家の「尾」の字だったのです。



伊豆東海岸にも数か所の尾張徳川家の石丁場があったことが分かっているのですが、江梨村と同じように「尾」の字が刻まれた石が残っているのは伊東市に1か所あるだけです。（残念ながら、その石があった場所は、今はわからなくなっているそうです。）

このように、西浦江梨地区に残る「尾」の字の刻まれた石は、尾張徳川家の石丁場が実在したことを証明する貴重な資料なのです。

・大久保丁場

絵図面をよく見てみると東側の境（左上）に「水戸様大久保御丁場」と記載されていて、西谷丁場に隣接して水戸徳川家の大久保丁場があったこともわかります。現在、竹が覆い繁っている当地には、石を切り出した遺構が確認され、この事実を確認できます。また、両丁場の境と思われる付近には、写真のような刻印が刻まれた石があり、境界を示すかもしれません。



魚見のある風景⑥ 内浦長浜



上の写真は、内浦三津の石井種生さんから寄贈された、石井さんが収集した内浦関係資料に含まれている絵葉書の複写写真で、内浦長浜の沖ノ島付近から小脇の Анд越しに富士山を望んだものです。網小屋の背後の山が長浜城です。

小脇の先端にある松の木に梯子をくくりつけた魚見がわずかに見えますが、左端の山の上に、もう一つの魚見が写されています。右の写真は、その部分を拡大したものです。下部しか写っていませんが、まっすぐに立てた柱と斜めに立てた柱が写っており、左側の斜めの柱2本の間には梯子が付けられているようです。長浜漁業組合の所蔵する「長浜漁業図」には、オオミネと沖ノ島のコミネほかに2箇所の魚見櫓が描かれていますが、その一つに該当するようです。

『沼津内浦の民俗』によれば、「長浜の網代から小脇にかけては山の上に4つのミネがあり、ホンミネとトンビの峰は大きな松の木に台が上げられており、梯子がかけられていた。小脇のクヌギのミネとその先の松の木のミネは大木に登るだけで施設はなかった。ホ



ンミネには2人くらい上がった。」と記されています。

『天保三年伊豆紀行』の「長浜漁業図」には、魚見櫓が描かれており、小屋の中には2人のミネドンも居ます。沖ノ島の魚見櫓が建てられる前は、これが網代のホンミネだったのではないかと思います。この位置ではないように見えます。別の絵葉書に、網代の北端の山腹に崩れた櫓の柱が写されたものがあり、これがそれにあたるものだと見られます。

『長浜漁場全図』に描かれたもう一つの魚見櫓は、長浜城の第4郭の端に建てられていたと見られます。こうして見ると、長浜城の山腹には5箇所のミネが設けられており、小脇の先端の松の木以外は柱で組んだ櫓だったようです。これらが同時にあったものではなく、古くはホンミネのみだったのではないかと考えられます。

沖ノ島の魚見櫓は宮戸中腹のオオミネに対してコミネと呼ばれていましたので、通常は、大網をオオミネが、魚を岸に寄せるシメ網をコミネが指示していたと見られます。当時の新聞記事にはよれば、オオミネのミネドンが、下のミネに上るのを指示したようです。同時にあった2つのミネはこれを補助するものであり、他の魚種の時や日光の当たり方で見難くなった時に使うものであったとも見られます。

資料館からのお知らせ

松籟の宴「白隠禅画展」の開催

本年度も、沼津御用邸を会場に開催される「松籟の宴2014」に協賛して、「白隠禅画展」を開催します。

期日 平成26年11月2日（日）～11月16日（日）

会場 歴史民俗資料館2階展示室

内容 原の名僧白隠の禅画を展示します。

歴民講座「甲斐武田氏と沼津」の開催

昨年度に引き続き、甲斐の武田氏と沼津に関わる講座を開催します。

期日 平成26年9月20日（土）13：30～

会場 市立図書館4階視聴覚ホール

演題 「興国寺城将曾根昌世を追って」

講師 武田氏研究会 平山優さん

内容 永禄12年の武田信玄の駿河攻に続く、相甲国分けの頃から武田勝頼の滅亡期まで河東の拠点興国寺城を守った曾根昌世を追います。

沼津市歴史民俗資料館だより

2014.9.25 発行 Vol.39 No.2（通巻203号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp